

『 信州の美術館と別所温泉の旅 』

日程 平成25年10月23日(水)～24日(木)

友の会会員 埜村 勲

今年度の友の会研修旅行は10月23・24日に行われ、2日間で信州の7美術館と松本城を訪ねる充実した美術研修であった。まず最初は長野市の水野美術館へ。風情ある日本庭園に迎えられ、「耳をすまして～日本画にきく音～」の展示室に入ると奥田元宋の「秋溪淙々」が目の前に。燃えるような紅葉と奥入瀬の溪流を描いた大作に感動して、それに続く菊池契月や川合玉堂などの名作も影が薄れるように思えた。

松代の池田満寿夫美術館では、国際的アーティスト・池田の版画、油絵、陶彫などを鑑賞し、昼食の後、無言館と信濃デッサン館を訪れた。戦没画学生を慰霊する無言館では、展示され遺作から絵画に対する若い情熱とエネルギーを感じる一方、数々の遺品から志半ばにして戦場に赴く無念の思いが伝わってきた。

別所観光ホテルでの懇親会は大変盛会で、廣瀬会長の浄瑠璃がきっかけとなって本場上平のお小夜節・といちんさ・利賀のこきりこが飛び出す中で、戦中、戦後の話題も尽きなかった。私の歌った「防空壕の歌」(空襲警報が聞こえたら..)を知っている人がだれもいなかったのは意外だった。



懇親会風景

2日目は最初に安曇野ちひろ美術館で彼女独特の感情豊かな子供や花の水彩画を堪能した後、高橋節郎美術館へ。

「高橋節郎の漆芸」と題した美術展が砺波市美術館で開催されたのは平成23年11月で、豊田市美術館の作品群であったが、今回は高橋の故郷に建つ美術館で壮大かつ幻想的な漆芸術の世界を再び味わうことができた。

松本城は壕の周りを歩いて眺めただけで、最後は松本市美術館で「藤松博展～戦後美術の一断面～」を鑑賞し、帰路についた。

私にとって、多くの美術館を巡り、初めて別所温泉の湯に浸かり、参加された皆さんと交流を深めるなど大変楽しい2日間であった。来年もぜひ参加したいと思っている。



水野美術館での記念撮影

『 第15回至高の精神展について 』

会期 2月1日(土)～3月2日(日)

砺波市美術館学芸員 杉本 積

至高の精神展 IN SPIRITU ALTISSIMOは、多様な展開を見せる現代美術の分野で活躍している作家を紹介する展覧会です。第15回目となる今回は、黒部市在住の彫刻家 加治 晋(かじ すずむ)さんの作品を紹介します。

加治さんは、1962年富山県新湊市(現射水市)に生まれます。大学在学中から石を主な素材として制作を行い、公募展に出品を始めます。1987年に金沢美術工芸大学大学院彫刻専攻修士課程を修了し、本格的に作家活動を開始しました。1991年には、第7回ヘンリー・ムーア大賞展に応募しエミリオ・グレコ特別賞を受賞し気鋭の彫刻家として注目を集めます。引き続きグループ展や公募展で精力的に発表を行い県内の展覧会にも多く招待されています。彼の初期作品は、白花崗岩や、白御影石を使用し“家”を意識した建築的な彫刻作品を制作していました。近年は、大理石を使って円を意識した造形や、鉄やアルミニウムなど金属素材を取り入れた作品を制作し表現の可能性を拡げています。

11月の末頃に私は、至高の精神展開催準備のために加治さんのアトリエを訪ねました。そこは、黒部市の国道

8号線から少し沿岸部に入った住宅街の外れにあり、銀色の外壁が美しいモダンな建物がアトリエでした。内部は、制作に使う機械など整然と並べられています。材料である大理石の立方体や、研磨中の作品などが置かれていて、傍らには、広いデスクと製図板があります。以前に訪ねたことのある木彫刻家のアトリエとは趣が全く違って新鮮な驚きがありました。加治さんは、早くも展覧会への準備を着々と進められていました。机の上に1/20スケールの展示会場模型を制作し、作品配置のシミュレーションを行っていました。この準備を目の当たりにして、加治さんの展覧会に対する並々ならぬ意欲を感じ、雑談を交えて2時間ほど打ち合わせを行いました。作家の熱い思いが鑑賞する方々に伝わるような展示にできればと考えています。



加治 晋 制作中の作品

今回の展覧会は、「絆のアイコン」と題して近作を中心に会場構成を行い、加治 晋さんの世界を紹介します。

『オリジナルミュージカル「KAGUYA」公演に向けて』

オリジナルミュージカル「KAGUYA」実行委員会 実行委員長 小幡 豊

「となみミュージカルキッズを応援する会」と砺波市文化会館では、来たる3月8日(土)と9日(日)の両日、砺波市文化会館大ホールにおいて、オリジナルミュージカル「KAGUYA」を公演します。

「KAGUYA」は、皆さんもよくご存知の「かぐや姫の物語」をモチーフにして、福田博子さんが子供たちのミュージカル用に脚本化され、松井千代子さんが作曲されたオリジナル作品です。

物語は、満月族の姫カグヤが新月族の王子との婚礼を待ちきれず、勝手に月読み(暦)を早めて天界を混乱させたため、人間界の山深い村の竹林に千年の間封じ込められます。そして地上を襲った嵐によって、仲間が竹の下敷きになってしまいますが、みんなで助けあうことを通して、「信じ合うことや助け合うこと」の大切さ、「竹のようなまっすぐな心の尊さ」、「本当の勇気」を学び、月に帰っていきます。そんなファンタジックで楽しい物語です。

出演者は「となみミュージカルキッズ」の子供たち33名と、公募により参加いただいた大人の方々10名です。演出・歌唱・ダンス・演技の指導は、地元の実力ある先生方です。また、舞台美術、小道具、衣装などの製作は、「キッズ」の父母の方々を中心としたボランティアスタッフの方々によるものです。

地元のアマチュアの人たちが一丸となって、力を合わせて創り上げるミュージカルですので、技術的にはプロにはかなわないと思いますが、逆にプロにはない魅力もありますし、アマチュアの人たちがつくる子どもミュージカルとしては、全国的にみてもかなりハイレベルなものだと思います。特に今回は、「キッズ」発足以来ご指導いただいている元劇団四季の荒巻先生が、昨年秋に活動拠点を砺波に移され、熱心にご指導いただき、これまで以上にクオリティの高いミュージカルをお見せできるのではないかと思います。

一緒に歌いたくなるような歌、変化に富んだ数々の曲、一生懸命ひたむきに演じ、歌い、踊る子供たち。今回のオリジナルミュージカルも皆様にきくと深い感動と元気を与えるものと思います。

《地域で創る砺波発オリジナルミュージカル》を是非ご覧ください！



—編集後記—

昨年10月27日(日)、第18回寺山修司短歌賞を受賞された高島裕さん(砺波市在住)をお迎えし、「子ども心の大切さ」の演題で講演会を開催しました。わくわくどきどきを求めてやまない子ども心を持ち続けて短歌と向き合っていきたいと抱負を語られました。

労働は、寒い。つかのま有線の安室をなぞるくちびるを見た 高島 裕

体温計くわえて窓に額つけ「ゆひら」とさわぐ雪のことかよ 穂村 弘

本年も一年どうぞよろしくお願いいたします (0)